

第17回国際日本学シンポジウム「日本化する法華経」 【総括】

浅田 徹*

本シンポジウムは比較日本学教育研究センターと、国文学研究資料館古典籍共同研究事業センター、日本学術振興会学術システム研究センターの共催で行われた。

本センターがシンポジウムで毎年発信してきた「国際日本学」の開拓というテーマと、国文学研究資料館を中心とする全国20の大学（お茶の水女子大学もその拠点校の一つ）・海外の日本学研究拠点が共同して行う文部科学省大規模プロジェクト「日本語の歴史的典籍の国際共同研究ネットワーク」の活動には十分な接点があり、イベントの共催に至ったものである。日本学術振興会からもその趣旨に対するご理解とご支援を頂くことができた。

「日本化する法華経」という総合テーマは、「日本語の歴史的典籍」とは何か、という問いかけから発している。法華経を「日本のものとなった」典籍と見ること、どういう問題が開拓できるかということ、国際的・学際的な研究者の協力によって探っていこうという試みである。

第1日（7月4日）は、本学の室伏学長、共催元の国文学研究資料館の今西祐一郎館長の挨拶により開会、パネルAとして「日本に融け込む『法華経』」のタイトルで4人の研究者にご報告頂いた。

・石井公成氏（駒澤大学）『『法華経』と芸能の結びつき ―聖徳太子伝・琵琶法師・延年―』

・ジャン＝ノエル・ロベール氏（コレージュ・

ド・フランス）「和漢両語の媒介者としての法華経和歌」

・グエン・ティ・オワイン氏（ベトナム社会科学院漢喃研究所）「日本とベトナムにおける法華経信仰に付いて ―古典から探す」

・馬駿氏（対外経済貿易大学）『『本朝法華験記』の比較文学的研究 ―表現の和化を中心に』

石井氏は法華経が芸能などを通じてどれほど深く日本に根付いていたかを、様々な史料から指摘なさった。ロベール氏は、漢訳仏典によって入ってきた信仰が、やまとことばの釈教歌という形で結晶していくことの意義を語られた。

オワイン氏はベトナムでの法華経享受（それは日本と同じく漢訳仏典による）の歴史的経緯について説明され、日本での享受との違いを指摘なさった。馬氏は、『法華験記』の表現を詳細に分析し、従来知られていたよりももっと多くの法華経の文言が影響していることを報告なさった。

ディスカッション終了後の交流会にも多くの来場者を得た。

第2日（7月5日）は古瀬センター長の挨拶により開始、午前の部では原口志津子氏（富山県立大学）の講演「富山市八尾町本法寺蔵『法華経曼荼羅図』について」が行われた。鎌倉時代に遡る大画面法華経絵の優品である。描き込まれた多くの場面から読みとれる情報について興味深い報告をして下さった。

午後の部、パネルB「日本の典籍としての『法

*お茶の水女子大学教授

華経』は国内の研究者による学際的なセッションである。

- ・浅田「書写と読誦 ―法華経の文字と声―」
- ・橋本貴朗氏（國學院大學）「能書が経典を書写するとき」
- ・肥爪周二氏（東京大学）「日本漢字音史から見た法華経」
- ・柴佳世乃氏（千葉大学）「法華経と読経道 ―芸道としての法華経読誦―」

浅田は経典が音声・表記ともに神聖なものとして、日本人が理解しがたくともそのまま保存されようとするということについて述べた。

橋本氏は書道史の立場から、経典の書写に能書家があたることについて、史料と遺品の両面からお話し下さった。肥爪氏は法華経読誦に用いられた漢字音（呉音）が、実際にはどのようなものとして構築されていたかを報告なさった。柴氏は、芸道としての読経道（経典に節を付けて読み上げる技芸）の形成と実態について、史料をもとにお話し下さった。

2日間を通して、全体の進行、二つのパネルのディスカッションの司会等はすべて浅田が行った。

天候には恵まれなかったものの、2日間合わせて100人を超える来場者（関係者を除く）があった。各パネルのディスカッションでは、フロアからの質問を質問用紙形式で募ったが、これも多くのコメントが寄せられた。来場者向けアンケートでは、イベント全体について肯定的なコメントが圧倒的で、主催者側としては喜ばしいことであった。

ご講演・ご報告下さった方々に、この場を借りて改めて心より御礼申し上げます。運営事務に当たられたセンターAA（原山絵美子・保田那々子両氏）、国文学研究資料館古典籍共同研究事業センターの神谷様にも御礼申し上げます。

イベント広報のため、日本文学・芸能史・思想

関係などいくつかの学会の例会・大会会場にチラシを置かせて頂いた。チラシを見てイベントを知ったという方も多く、ご厚意に感謝申し上げます。

本シンポジウムの内容は、当『年報』に活字化する通常の形態ではなく、さらに多くの研究者からの執筆を得て、学術書出版社より書籍形態で刊行する予定である（勉誠出版『アジア遊学』シリーズの一冊として。平成28年度刊行予定）。そのため、『年報』には各報告・講演の要旨のみを掲載させて頂くことにした。この点、ご了解頂きたい。

本シンポジウムは、前述のプロジェクト「日本語の歴史的典籍の国際共同研究ネットワーク」の「拠点主導共同研究」としても位置づけられている。そのため、本センターのみでなく、国文学研究資料館のホームページ内に設けられている、同プロジェクトの活動報告にも掲載されている。他の拠点校の活動、各種共同研究と合わせ、人文系としては異例の大規模プロジェクト（平成27年度が実質的なスタート）の順調な進展を期待する。